

# 「物語の論理についてータイムマシンと スーパーマン」(研究ノート)

On the Logic of Fiction  
— Time Machines and Superman —

山本 卓

## 【はじめに】

フランスの作家アラゴンの後期小説と出会うことで私は物語の面白さを教えられた。アラゴン自身が「異常な小説」と呼んだ彼の後期小説は物語のさまざまな約束ごとへの根底的な問いなおしを含んでいた。それを契機として私は物語の論理についての数々の疑問をむしろ膨らませてきたのだった。

そうした中で数年前から私は共通教養科目の「文学」を担当するという願ってもない機会を与えられた。この講義録を作成する過程で日頃感じている小説や物語に関する多くの疑問が溶岩のように噴出してくるのを感じて私は頬を弛めた。その疑問群はおおむね「物語と現実との間の相互作用」を巡るものであった。以下では「文学」の講義録をまとめ上げていく過程で生じてきた、そうした筆者の思考の途中経過を素描してみたい。

## 【物語の論理について】

人はなぜ物語を作るのだろうか。精神分析学者の岸田秀は「人間は物語を作る動物である」と言う。ここで岸田の言う「物語」とは彼のキーワードである「幻想」に通じる言葉である。つまり「物語」は「事実とかけ離れた・自分に都合の良い説明」を意味している。人間は自己を正当化するために「物語」を必要とすると言うのだ。(cf. 岸田秀『ものぐさ精神分析』・『続 ものぐさ精神分析』中公文庫)

フランスの作家アラゴンはその逆に「小説」を世界認識のための装置として捉える。世界という現象の同時多発はその「ありのままの状態」では人間の認識を超える混沌に過ぎない。その混沌に目鼻を付けるのが人間が作りだした「小説」という装置の役目だと言うのだ。そうした物語化を通して初めて混沌は人間にとって理解可能なものとなる。バルザックが描いた19世紀フランス社会は描かれることによって初めてそのようなものとして顕現してきたのだ。あるいは「不条理の小説」が現れて初めて不条理の感情がどのようなものなのかが一般的な人間にも認識できるものとなったのだ。カミュが『異邦人』の主人公ムルソーを創造するまでは、ムルソーは世界に存在しなかった。つまりムルソー的な人間が問題になるような「事態」も存在しなかったのだ。そうした意味で物語とは世界を理解するための装置なのである。物語とは不定型な現実の形を与えるものなのだ。

言い換えれば物語は人間たちに現実とは何かを説明する。(もちろんリアリズムの小説ではない数多くの小説も存在する。だが反リアリズムの小説も「反対するための現実」の存在を否定する訳ではない。)それは説明の体系としての側面を持つのだ。説明の体系は整合性を内包していなければならない。その内部では最低限度の「納得の行く」論理的整合性を要求されるデータの網の目の目なのだ。

だが物語は本当に現実を写す鏡たりうるのだろうか。物語が混沌とした現実の一つの構造化であることを、例えば批評家のオルガ・ベルナルは『ベケットの小説』の中で次のように表現する。

「物語とは何か？ それは、時間の勝手気ままな連続に与えられた一つの方向、時に一つの起源と終末ととを与えるための構造ではないだろうか？」(中略)だから「一つの物語をでっち上げることは、時間の混沌の中に、方向を示す一つの意味を挿入することである。」(p.184)「説明するとは、従って、世界の悪魔祓いをすることであり、言語的概念によって混沌を支配することである。」(p.20.)(『ベケットの小説』安藤信也訳、紀伊国屋書店)

つまり物語は人工物だという事実をしっかりと認識する必要があるのだ。物語というものは現実を抽象し変形して一つの人工的な型の中に押し込むのだ。それは言語による一つの構造物であり、それゆえに一つの人工物である。物語もまた、人間が作った他の道具たちと同様に、部品や構造を持っているのだ。

物語の中ではおよそどのようなことでも起こりうる。現実には存在しないものを存在させてしまうことすら可能だ。非存在を存在に変える作業はSFやファンタジーの作家たちにはお馴染みのものだろう。その気になればタイムマシンだろうが怪物だろうが何でも思いのままに創造できるのだ。

だが、作者は時に自己の万能を過信してしまう。物語の展開までもが自分の恣意のままだと思い込むのだ。(そこでタイムマシンは作者の思いどおりに必ず故障することになるのだ。)

「タイムマシンはなぜ故障するのか?」と尋ねると学生諸君はみな怪訝な顔をする。なにしろH. G. ウェルズのタイムマシンであれ、『バック・トゥ・ザ・ヒューチャー』のタイムマシンであれ、あるいは野比のび太君のタイムマシンであれ、ともかくタイムマシンは必ずと言ってよいほどに故障するのだ。その理由はどこに有るのだろうか。

タイムマシンの故障。それは問題を自ら生み出し解決するための物語の策略なのだ。問題の発生とその解決という一連の単純化された視点から物語を照射することで我々は物語の持つ内的な論理を読み解く一つの道具を手に入れる。物語による世界の単純化は確かに対象の「全面的な理解」とは言えない。だがそれは物語の持つ「作り物」としての側面を顕在化してくれるのだ。物語の機構を顕在化してくれるのだ。

物語の論理がタイムマシンの故障というトラブルの発生を要求するのだ。問題が何事も生じないならば物語による問題解決も生じようがない。そして見事な問題解決の巧みさを読者諸氏に誇示することこそ物語作者の一番の腕の見せ所なのである。物語の中で危機が生じるのは、いかに見事にそれを切り抜けられるかという「手練の早業」を読者諸氏に見せつけるため

なのだ。この危機とは実は作者によって巧妙に仕掛けられた「嘘」に他ならないと言える。物語というものが作者の恣意の上に成立していることをここでも肝に銘じておくべきだろう。

さて、あちらこちらのタイムマシンが申し合わせたかのように故障する。なぜこうした相似形のプロットが無数の物語の中で反復されるのか。互いに関連性が無いはずの数々の物語の間でのこうしたプロットの反復は私たち読者に奇妙な既視感(デジャ・ビュ)を感じさせる。

大部分の読者は物語におけるストーリー展開をそのような「ご都合主義」に従ったものだとは半ば納得している。何しろ高々、それは物語に過ぎないのだ。めくじらを立てるほどのものではあるまい。だが、中にはそれに断固として異議申立てを執行するアラゴンのような作家も存在する。彼の「異常な小説」はそうした「ご都合主義」への「否!」から成立している。

物語の作者にとっては、二つの奇妙な強迫観念が存在すると筆者に思われる。その二つとは次のようなものだ。

(1)物語の中では必ず出来事が起きなければならないこと、そして、(2)起きた出来事はつじつまが合っていなければならないこと、この二つの強迫観念である。

物語にとって出来事が必要だという前者の命題はほとんど全ての物語に当てはまる命題ではないだろうか。恋愛、冒険、犯罪、陰謀、友情、誤解・・・その中身は何でも構わない。ともかくも出来事が発生することで、解決しなければならない問題が生じるのだ。作者にとって興味のあるテーマを問題発生から問題解決へといたる一連の時系列の中に整合的に整列させることで、都合の良い物語は完成する。だが、少なくともそのためには最低限何らかの出来事が発生する必要が有るのだ。(そこに作者のご都合主義が発生する理由が有る。)

この命題に当てはまらない唯一の例外はベケットの場合だろう。しかしながら彼の『ゴドーを待ちながら』はその物語そのものの存在が他の物語群に対する異議申し立てとしての「事件」として成立していたとも言える

だろう。

ところで大多数の物語作者たちは自分の嘘が読者に露呈することを過剰なまでに恐れているように思われる。「こんな出鱈目のことまで書いてしまって構わないのだろうか」と物語を作りつつある作者は自問自答する。嘘つきが嘘をつくことを恐れているのだ。

そうした自己規制を打ち捨てて大胆な大嘘をついてしまう作者も存在する。例えば藤枝静男の『田紳有楽』では何と金魚とぐいのみとが性交する。筆者の好みから言えば上記のような大嘘をつく作者こそ物語の楽しみを知り尽くしている人間に見えるのである。

では物語の「本当らしさ」とは何なのか。ある物語が「いかにも本当らしい」とか「まるで本当に有ったような話だ」とか我々は良く口にする。こうした場合の本当らしさとは一体どのようなものなのだろうか。それを考えてみると我々はやはり二種類の「本当らしさ」にぶつかることになる。一つは「現実の写し絵」としての「本当らしさ」であり、もう一つは「論理の整合性」として「本当らしさ」である。

物語の整合性の問題には二つのレベルが存在するのだ。先ず第一には、ある物語の内部と「外部」との整合性の問題、そして第二には、ある物語の内部でのデータ相互の整合性の問題だ。その二つを切り離して考えずに「ごちゃまぜにする」と事が面倒になってしまう。

先ず第一の「本当らしさ」とは物語とその「外部」（現実）との並行性である。つまり物語の内容を形成しているデータそのものが現実中存在する事象を「反映している」場合がそれにあたる。一番の良い例は「ノンフィクション」の物語だろう。このレベルでは物語のデータのそれぞれが現実のデータとの対応を迫られる。それは最も初歩的な意味での「本当らしさ」である。

もう一つの「本当らしさ」とは物語の内部での物語のデータそのものの整合性である。つまり物語の内部で用いられているデータそれぞれの相互

間での矛盾の無さである。もしもデータの相互間に矛盾が存在するときにはその物語は「嘘」となってしまう。もともと嘘であるはずの物語の二重の嘘と見なされるのだ。

ここで一つの物語の中に現れるさまざまなデータの相互間の整合性について考えてみよう。例えば物語の中の一人の登場人物について具体的に考えてみれば分かりやすい。ある人物が物語のなかに出現するとき、彼はさまざまな属性を備えて現れてくる。例えばクラーク・ケントという人物の人物像は「実は彼はスーパーマンなのだ」というデータと矛盾しない。データ相互の整合性の問題を物語の内部に限れば、どんな大嘘でも整合的に語れるはずなのだ。

つまり「外部」を否定してしまえば物語はどのような非現実的な仮定をも成立させることが可能となる。いわゆる反世界を論理的に構築することさえも可能となる。物語にとっての整合性とはその内部の整合性に他ならないからだ。

従って「スーパーマンは空を飛ぶことができる」というデータは物語の内部では何の苦もなく成立する。データが真偽を問われるのは「外部」との接触においてのみなのだ。それゆえに「外部」さえ無視すればどのような奇想天外な仮定も物語には可能となる。

ところが物語が余りにも都合良く展開すれば、読者の疑問を引き起こすことになる。テレビのドラマは「わざとらしい」ストーリーが氾濫している。例えばゴールデンアワーの時代劇などはその典型だ。だが、中にはそうした「わざとらしい」部分を偏愛する読者も存在する。彼らは通俗物語が「嘘」であることを知りつつ、その「嘘」に酔わされることを楽しむ一種の酩酊の遊戯を楽しんでいるのだ。それでも、このような作為が余りにも赤裸々に仕掛けられている場合には我々は顔を顰める。その物語が読者を空想の世界に没入させてくれないからだ。夢から醒めてしまうからだ。

なぜ通俗論理という紋切り型の筋に迎合した物語が大量生産されるのだろうか。すでに述べたように物語作者にとっては「本当らしさ」を厳守す

べきだという思い込みが有るからなのである。作者にとって物語は「現実に見合っている」必要が有るのだ。

だが「現実という混沌」という視点から見れば物語は単純化の作業とも見えてくる。現実には爆発的な現象の同時多発であり、一種の混沌状態である。データの的にも時間的にも現象的にも記述不可能なものが現実だ。もしも現に今、世界で起こりつつある「全現実」を相手にして格闘しようと思ったら作家は確実に負ける。だから現実を相手に伝えたいと思ったら現実を「加工」しなければならない。つまり相手に伝えたいと思う情報を選択し単純化する必要が有るのだ。

スペインの作家ホセ・セーラの作品に『蜂の巣』というものが有る。彼は大きなアパートの中の全ての家族に起こることを完全に記述しようと考えた。160人の登場人物の事件を一冊の本に記述するのだ。だが、この作品は実は現象の「同時多発」を一つの線分の連なりに置き換えている。電気の並列を電気の直列に歪曲しているのだ。

データが錯綜してくれば説明の体系としての物語は相手に伝わりにくい納得の行きにくいものになってしまう。シムノンが言った「単純化」が必要なのだ。相手が納得しやすい説明体系が必要になってくるのだ。そこに誰もが納得の行く出来合いの物語に重ね合わせようという通俗論理が介入してくる。万人が理解できるレヴェルにまで説明の内容を単純化してしまう作者の怠慢が生じるのだ。

では、こうした予定調和的な物語はなぜ書かれてしまうのか。通俗物語においては読者が予想した物語の展開を作者がまったく裏切ることなしに場面が展開していくということが往々にして起こる。つまり読者が自分にとって未知のはずの物語の未来を予知し熟知しているという訳である。このようなことがなぜ生じるのか。それは物語の作者が読者の通俗論理に迎合しているからである。作者が大衆の一番低い部分での要求に妥協しているのだ。つまり「彼らの欲しがるものを与えよ」と言う訳なのである。

かくして無数の既視感に満ちた物語が大量生産される。漫画、映画、テ

レヴィなどのマスメディアに見られる物語群はすべて上記のような通俗論理の支配に色濃く染まっているのである。それを何の抵抗もなく飲み込んでいる大衆が存在する限り事情は変わらないのだ。複製の物語が大量に生産される。

そうした通俗論理から抜け出すために何が必要なのか。新しい物語を生み出すためには何が必要なのか。それは「言語創造」という問題である。例えば日常の言葉と詩的な言葉との差異について言語学者の池上嘉彦氏は次のように言う。「日常のことばを使っているかぎり、われわれはすでに多く惰性化した日常のことばの決まりの上に成り立つ日常の世界の中で、これまた惰性化した営みを繰り返すだけである。(池上嘉彦『記号論への招待』pp.3-4)

それに対して「詩人の意図しているのは、この惰性に揺さぶりをかけるということである。既成の語形と語義の間の結びつきをずらしてみる。そして、その新鮮なことば遣いの創り出す意味を、日常の世界を超えるための踏み台とするわけである。」(id.p.4)

そうした詩的言語のたくらみを小説に密輸入することで通俗論理に落ち込みがちな物語を掬い上げてきた作家たちが実は数多く存在している。こんな物語も有ったのかと感心するのは、そうした作家と出会った時だ。学生諸君に紹介していきたいのはそうした詩的物語で書く物語作家たちなのである。